

④採卵について

採卵は実に奥が深く医師の技量の差が出る所です。ただ卵を採れば良いというのではなく、いかに安全に、痛みを少なくして、確実に、かつスピーディーに行えるかが大切となってきます。以下順にポイントを説明したいと思います。

安全に行う

現在採卵は全例経膈エコー下に行っており、子宮、膀胱、腸、血管等は避けて、卵巣内の卵胞のみを穿刺しています。そのため通常であれば問題なく採卵を行う事が可能です。チョコレート腫や子宮筋腫がある採卵困難例に対しても慎重に採卵すれば大体は問題なく行う事が出来ます。

いくらたくさん採卵できて安全に行えなければ全く意味が無くなります。そのため採卵を行う上で最も大切な事は「安全に採卵をするという事」になります。以下の採卵の数やスピードも大切ですが、あくまで安全が第一です。

痛みを少なくする

採卵後に痛みを少なくするのが医師の技量の見せどころになります。どうしたら痛くなくなるかについてですが、以下の点がポイントになります。①穿刺回数を出来るだけ少なくする、②最短距離で採卵する。卵胞が沢山あったとしても原則として片方の卵巣につき1回の穿刺で採卵を終える事が基本と言えます。その結果出血量も少なくなり時間も短縮され痛みが少なくなります。

確実性

採卵数をなるべく多くする、この確実性を増していく努力をする事が大切です。特に卵胞数が少ない場合にはフラッシュを何度も行い全ての卵を確実に採卵出来るように工夫をします。

スピーディーに行う

ゆっくり時間をかけて採卵をしていると卵の質がどんどん低下していきます。卵は体外に出したら出来るだけ早く培養庫に入れる必要があります。そのため一つ一つの動作をスピーディーに行い卵への余計なストレスを与えないように気をつけます。

感染対策を行う

膈内を生理食塩水で十分に洗浄してから採卵を行います。また採卵後は抗生剤の点滴を行います。抗生剤の内服も一日3回4日間施行します。

採卵困難例

現在経膈エコー下の採卵は安全に行える手技になっていると言えます。外来で行う事が出来て、ほとんどトラブルも起きません。そういう中で時々手痛い合併症が起こる事もあります。以下のようなケースは採卵を慎重に行う必要があります。

チョコレートとう腫がある場合

原則として採卵時にチョコレートとう腫は穿刺しない事が基本と思われます。チョコレートが腹腔内にこぼれると腹膜炎を起こす原因になるため、チョコレートとう腫を避けながら卵胞を穿刺する必要があります。エコーでチョコレートとう腫と卵胞がわかりにくく、誤ってチョコレートとう腫を穿刺してしまった場合は抗生剤の内服を長めに十分感染予防対策をとる必要があります。

子宮筋腫がある場合

子宮筋腫があり卵胞の位置が遠くなり穿刺困難なケースもあります。原則として子宮を刺す事は避けられた方が良いでしょう。刺さないと採卵が出来ないという場合、麻酔を十分にかけて段階で、やや細かい針を使用して穿刺します。採卵後の子宮からの出血にも気をつけます。

理想としては治療開始前のエコー検査の際に、筋腫があり採卵困難が予測される場合には、腹腔鏡下子宮筋腫核出術を行い、その後採卵を行う事が望ましいと言えます。

卵巣の動きが悪く、卵胞までの距離が遠い場合

子宮内膜症や開腹既往例等は、卵巣が癒着して動きが悪くなっており、採卵の際に卵胞までの距離が遠くなり、採卵が困難になる症例があります。助手に腹部を圧迫してもらい出来るだけ経膈超音波の先端を押し上げて卵巣へ近づけて、最短距離で採卵します。この際血管、子宮、腸、膀胱は刺さないように最大限気をつけます。

経腹採卵

①、②、③のようなケースで経膈採卵が困難な場合は、経腹採卵を行う事もあります。症例によっては明らかに経腹採卵の方が安全なケースもあります。

方法としては経膈エコーを腹部に当てて、経膈採卵と同様に穿刺します。この際助手の医師がエコーを誘導して、もう一人の医師が穿刺を行う事が必要になります。経膈採卵と異なり医師一人では難しいと思われます。

卵胞が1個の場合

卵胞が1個しかない場合、特段難しいという訳ではありません。普通の採卵と同じになります。ただより確実に採卵するための注意点として、助手に腹部を圧迫してもらい卵巣をしっかりと固定してもらう事が大切と言えます。それにより卵巣が動かなくなりより確実に採卵が行えます。この際腹部を強く押し

すぎると排卵してしまうため注意が必要です。また十分に卵胞内をフラッシュして、確実に卵を回収する事も大切です。